手つかずの部屋
第二回

Loy Kratung
水の女神に祈りを捧げる精霊流しの歌

矢原　徹一

大学院生D1時代の10月から12月にかけて、タイの北部から半島部まで、ジープで移動しながら各地の熱帯林を訪れ、植物の調査をするという素晴らしい機会に恵まれた。中学校時代に植物の多様性に興味を持ち、その興味の赴くままに大学院に進学した私にとって、熱帯の植物を実際に見る機会は、興奮に満ちたものだった。見るものすべてが新しく、たくさんの植物を毎日夢中で採集した。

若くもあったので、昼間は野外で調査に汗を流し、夕食後は夜中まで採集した植物を新聞紙にはさみ、翌日は5時に起きて標本の整形をするという毎日を3カ月間続けた。12月半ばに、Khao Pawta Luan Kaeo という半島部の山で、約1200mの標高にある山小屋から山麓まで植物の採集をしながら歩いて下ったあとは、ついに熱を出した。しかし一晩寝ただけで元気を取り戻し、翌日も植物調査に出かけた。

そのような毎日の中で、夕食時だけは植物から離れ、運転手さんやコックさんと一緒に食卓を囲みながらメコン（タイの人たちが水の代わりのように飲むウイスキー）

を飲み、歌を歌った。調査チームのタイのみなさんはとても歌が好きだったが、日本から参加した調査メンバーの中で、タイの人たちが好むテンポの良い歌を歌えたのは私だけだったので、毎晩、タイ日本対抗歌合戦の日本代表をつとめる役回りとなった。

タイで好評だったのは、ソーラン節や炭鉱節のような手拍子を打ちながら歌える歌だ。テンポの遅い、哀愁のある曲調だと"sleepy"と言われた。ただし、筑豊の子守唄は、なぜか好評で、ほぼ毎晩のように歌わされた。筑豊出身の岡田京子さんが作曲された歌だ。

遠賀川土堤　野焼きが過ぎりゃ　ひもじさわすれて
つくしんぼ探す
あ～あ、あああああ、ああああ
はぜの実よりもまっかに燃えろ　死んだヤマみおろす　烏尾峠
あ～あ、ああああ、ああああ

この「あ～あ、ああああ、ああああ」という間奏部分が、受けた理由のようだった。ちなみに、秋に「はぜ」の木を赤く彩るのは実ではなく葉であり、作詞家の方が勘違いされていたようだ。しかし、「葉」よりも「実」のほうが歌いやすいので、植物学的詳細にはこだわらないことにしている。

毎晩の歌合戦のしめは、タイの人なら誰でも知っているロイカトン（Loy Krathong）の歌、タイの陰暦12月（実際には11月）の満月の日に行われる精霊流しで歌われる歌だ。野帳にタイ語の歌詞を書きとめ、覚えて、毎晩一緒に歌った。

ワンペンデュアンシップソン　ナムカノンテンタリン
ラオタンライシャイイン　サーヌッカンチンワン
ロイカトン
ロイロイカトン　ロイロイカトン　ロイカトン　カンレウ
コーシェンノン　ケウオックマーランウォン
ランウォンワン　ロイカトン　ランウォンワン　ロ

イカトン
ブーンチャソン　ハイラオスックチャイ　ブーンチャソン　ハイラオスックチャイ

当時は意味もわからず、丸暗記して歌った。４０年近く経った今でも、ちゃんと歌える。

今は便利な時代で、インターネットで検索すれば歌詞を掲載し、日本語や英語に翻訳したサイトがたくさんある。

ロイは浮かべる、カトンはバナナの葉を折りたたんで作った小舟のことで、ロイカトンの日にはロイカトンの歌を歌いながら、この小舟を川に流す。

調査旅行を続けるうちに、私たちは北部のチェンマイ州の小さな山村で、この祭りの日を迎えた。真っ暗な森の中を、みんなで川まで歩いた。川辺には花で飾ったバナナの小舟を持って村人たちが集まり、次々に川に流していった。それはとても幻想的で、どこか懐かしい光景だった。

集まった村人たちには、若者が多かったように思う。もちろん、男性も女性もいた。小舟を流したあとは、ロイカトンの歌を歌いながら、踊る。両手をひろげ、外向きにきれいにそらせた掌を左右に動かしながら、優雅に踊る。私たちも見よう見まねで踊ったが、タイの人たちのように掌をきれいにそらせることができず、もちろん動きもぎこちなかった。

男女でペアを組んで踊るときには、男性は大きく手をひろげ、女性は胸の前で腕をクロスさせ、向かい合って踊るそうだ。残念ながら私たちの調査チームには女性がいなかったので、ペアダンスを踊ってみる機会がなかった。

タイを訪問する機会があれば、ロイカトンの歌を覚えていくと良い。タイの人たちはこの歌がみんな大好きだ。そしてきっと、胸をときめかせながら、満月の下でペアダンスを踊った思い出を持っている人が多いことだろう。もしあなたが若者なら、この歌を知っていれば、タイの人とペアダンスを踊るきっかけができるかもしれない。

満月の日をはさんで訪問した北部のチェンマイ州は

山岳地帯であり、深い森に抱かれた州だった。まず思い出されるのが、石灰岩の奇峰、チェンダオ山（２２２５ｍ）だ。ここは、固有植物（世界でもこの山にしかない植物）が多い山だ。頂上をめざして森を抜け、急峻な岩場に出ると、固有のツリフネソウ属の一種 Impatiens kerriae が花をつけていた。見事な大輪の白い花筒から、虫を呼ぶための黄色の彩りが覗いていた。

日本のツリフネソウは細くて柔らかい茎をもつ一年草だが、Impatiens kerriae はがっしりとした茎を持つ低木だ。高さは１ｍくらいになるものがある。ツリフネソウ属の植物はみな一年草と思いこんでいたので、この種の姿には驚いた。霧がかかった稜線で、石灰岩のくぼみにしがみつくように生えていた。チェンダオ山の特殊な環境に適応して進化した、この山にしかない植物の奇妙な姿に見とれて、私はしばらく霧の中にかがみこんで、カメラのシャッターを切り続けた。

チェンマイ州にはさらに高い山がある。インタノン山（２５６５ｍ）だ。この山の頂上には軍事用のレーダーがあり、このため頂上まで軍用道路が作られていた。許可を得てこの道路を利用し、標高が異なる地点で調査をした。約５００ｍの山麓から、２０００ｍの標高を登るにつれて、森林の様子が次々に変わっていく。山麓の森は、乾燥した明るい林だが、標高が上がると次第に常緑樹が増えて行く。そして山頂に近付くと、森は常に霧に覆われ、苔むした幹や枝に着生植物が茂る、雲霧林と呼ばれる状態になる。それは精霊が住んでいそうな、神々しい森だった。

１９７９年の調査ではわずか数日しかインタノン山に滞在できなかった。いつの日か、この山により長期に滞在し、標高にともなう植物分布の変化を調べてみたいものだと思った。

その思いは、３３年後の２０１１年にかなった。環境省予算によるアジアの生物多様性観測プロジェクトの一環として、インタノン山を再訪し、トランセクト法という定量的な調査法を使って、標高別の比較調査を始めることができた。その後、研究チームの協力を得て、山麓から頂上までの７地点で調査を行い、標高にともなう植物種の変化を調べることができた。

この33年間に、タイは大きく変わった。ロイカトンの日には、ろうそくを灯した灯篭を空に飛ばすようになり、チェンマイ市のロイカトンは一大観光イベントと化した。そしてチェンマイ州の森はすっかり減ってしまった。

しかし幸いなことに、インタノン山の森は国立公園として保護され、昔の姿をとどめていた。神々しく、威厳のある森がまだそこにあった。ロイカトンの歌を心のなかで口ずさみながら、私はインタノン山の、精霊の森に入った。

編集後記

久保　裕貴
数理生物学

本誌「決断科学」第二号の編集期間とちょうど同時期に、「持続可能な社会を拓く決断科学大学院プログラム」では、所属するメンバー全員が自身のプログラムでの活動をまとめたポートフォリオを作成することになっていました。

ポートフォリオはアートやデザインといった分野において、製作者のこれまでの作品を集めて一覧にし、実績として示す、という形で見られることが多いとおもいます。教育の分野では、ポートフォリオに含められる対象はより広く捉えられており、学生の成果に対して、どのような努力を行ったか、ということや、目標に対して、どのくらい進んでいるのか、また、どのようなことが得られたか、といったことまでが範疇となりえます。ポートフォリオは、従来の評価の仕方とは違った、教育と評価を上手につなげるような方法となることが期待されています。

インターネットが発達しはじめたころから、ウェブ上でポートフォリオを公開する電子ポートフォリオ（E-portfolio）がよく使われるようになりました。個人はもちろん、海外の大学などでは積極的に導入され、日本に